

著者自身による解題：

『ヒュームの自然主義と懐疑主義』

@哲学オンラインセミナー（2021年3月6日）

（企画：同・近世哲学プラットフォーム）

澤田和範（著者）^{1 2}

¹ 日本学術振興会特別研究員 PD（関西学院大学）

² 関西学院大学／京都教育大学・非常勤講師

とりあえず、ヒュームについて

ヒューム紹介（1）——見たい目

歴史家としての主著『イングランド史』（1754）を出版した頃、
たぶん40歳過ぎくらいのデイヴィッド・ヒューム。



David Hume by Allan Ramsay (1754)

ヒューム紹介（2）——主要な著作

1711 ヒューム誕生

1734 仏ラ・フレーションで『人間本性論』を執筆（23歳）

1739 『人間本性論』第一・二巻（第三巻は翌1940年）

1741 『道徳・政治論集』（後に『道徳・政治・文学論集』）

1748 『人間知性に関する哲学論集』（後に『人間知性研究』）

1751 『道徳原理研究』

1754 『イングランド史』（1762年まで）

1757 『四論集』（「宗教の自然史」、「情念論」、「悲劇について」、
「趣味の基準について」）

1776 ヒューム没

1779 『自然宗教に関する対話』（← 岩波文庫で邦訳が出た！）

ヒューム紹介（3）——彼の哲学とその解釈

- ヒュームは「巨大かつ多面的な思想家」である¹。もちろん、一冊の本でヒュームのすべてを紹介することはできない。
- とはいえ、彼の哲学は生前から過激な「**懐疑主義**」としてよく知られていた（リード、ビーティー、カント、T. H. グリーン、ラッセルなど）。
- しかし、1905年に画期的な論文「ヒュームの自然主義」がケンプ・スミスによって発表される。ヒューム哲学は懐疑主義というよりも、むしろ「**自然主義**」なのだとされた。
- とくに1980年前後から、「懐疑主義」解釈と「自然主義」解釈、および**その両立可能性**をめぐって論戦が続いている。

¹ 坂本達哉（1995）『ヒュームの文明社会』、創文社、p. 371

『ヒュームの自然主義と懐疑主義』
(澤田和範, 勁草書房, 2021)

自然主義者か、懐疑主義者か？どちらが本当のヒュームなのか？

百年以上にわたり解釈論争の中心を占めてきた問いに対して、主著『人間本性論』を哲学探究という行為の書物として追いかけながら、その矛盾なき統一的な哲学を精緻に描き出す。

→ じつは本書が正しければ、**どちらも本当のヒュームなのだ。**

しかし、某通販サイトのレビューで次のように書かれてしまい、ものすごく脱力しました……

やっているのは、ほぼ正反対のことなんだけれど……

★★★★☆ 統合的解釈の試みについて、もう少し追加の記述が欲しい

2021年2月15日に日本でレビュー済み

「本書は、「自然主義」解釈と「懐疑主義」解釈の対立というヒューム哲学研究の中心問題を発展的に解消することを目標とするものであった。」(本書203ページ)

これが本書の「結論」部分の最初の一文であり、端的に本書の内容を要約しているが、果たしてその目標が果たされたのか判断は難しい。率直な感想としては、自然主義に立つヒュームと懐疑主義に立つヒュームの二つの顔を『人間本性論』から見出して、そういう相対する顔を持つことをヒューム自身が許容していたと解釈したとように読めた。それを矛盾と言わないのであれば、そうなのかもしれないが、少なくとも論者がヒュームをいずれかの立場として解してきたわけで、釈然としないところは残る。

1. 「自然主義に立つヒュームと懐疑主義に立つヒュームの二つの顔を『人間本性論』から見出して、」 ← **そのとおり。**
2. 「そういう相対する顔を持つことをヒューム自身が許容していたと解釈したと読めた。それを矛盾と言わないのであれば、そうなのかもしれないが、…釈然としないところが残る…。」
↑ **もちろん違う。** 仮にそのような解釈を採るのであれば、むしろヒュームは「矛盾」していると言わねばならない。

本書の主張はこれ！

あらためて本書の内容をまとめるなら、

1. 自然主義者としてのヒュームと、懐疑主義者としてのヒュームを、『人間本性論』のテキストをもとに描き出しつつ²、
2. **この二つの顔が「相対する」（つまり矛盾する）ものだ**という（従来のほとんどの解釈者たちが陰に陽に採用してきた）**前提を覆す**。——じつは「統合的解釈」は可能なのである。

² じつは『人間本性論』以外の著作にもそれなりに目配りはしているはず。

とはいえ、ここだけの話だけれど

どのように「統合」されるかは、じつはおまけだと思う

本書では、**自然主義者としてのヒューム像、懐疑主義者としてのヒューム像、それら自体を刷新しようとしている**。したがって、その意味では、両者の「統合」はその結果として出てくるだけ。

むしろ、次の点に注目してほしい。

「ヒューム哲学は、従来の解釈者たちが考えているよりも、**より優れて自然主義的**であり、しかも、**徹底して懐疑主義的**である。」（本書「序」 p. viii）

→ ヒュームの自然主義や懐疑主義、**それら自体の内実**に注目してください。新しいことをいろいろ発見していると思います。

ヒュームの専門家以外の哲学者たちへ 向けた内容紹介

序

第Ⅰ部 自然主義

1. 「必然的結合」と因果推論
2. 「一般規則」の発生論的解釈
3. 情念論における「実験的推理法」

第Ⅱ部 懐疑主義

4. 懐疑と自然
5. ピュロン主義的メタ哲学

結論

第一章の（著者自身が考える）見どころ

「必然的結合」と因果推論

- しばしばヒュームに帰せられている**因果の規則性説**は、じつはヒューム自身の説ではない。
- とはいえ、**懐疑論者としてのヒューム**はここでも健在。ヒュームは、因果的必然性について我々は無知なのだという因果的必然性の観念の「非表象」説を採る。
- ヒュームが人間の理性を**動物の理性**と類比的に捉えたことはよく知られているが、むしろ「原因」の二つの定義からは、ヒュームが現代の^{dual process theory}**二重過程理論**のようなものを採用していることが明らかになる。もちろんヒュームの**実験的推理法**には、動物的推論ではなく**反省的推論**が必要である。

第二章の（著者自身が考える）見どころ

「一般規則」の発生論的解釈

- ヒュームの**実験的推理法**は、いくつかの「一般規則」に基づいて遂行されている。**一般規則**とは個別的な因果推論の規範である。
- 従来の解釈は総じて、ヒュームが一般規則をどのように正当化しているのかに答えようとしてきた。しかし——
- 「一般規則に従うことは、**きわめて非哲学的な**種類の蓋然的推論であり…」（強調引用者）。第二章の主題は、この不可解なテキストの謎解きである。
- じつは、ヒュームは**一般規則の規範性の起源を人間本性（＝本能）に求める自然主義的説明**を追求している。思い切って単純に言えば、さまざまな規則候補たちが生き残りをかけて争っており、ヒュームは生き残った規則を「正しい」一般規則として採用している。つまり、**正当化「基準」はない**。

第三章の（著者自身が考える）見どころ

情念論における「実験的推理法」

- 『人間本性論』のサブタイトルは、ずばり「実験的推理法を精神の諸問題に導入する試み」である。しかし、そのわりには「**実験的推理法**」とは何かがよく分かっていなかった。
- 私の答えは**仮説演繹法のプロトタイプ**というもの。ヒュームの元ネタは、おそらくニュートンの『光学』（1704）に見られる「分析と総合の方法」。とはいえ、ヒュームとニュートンでは**仮説**の取り扱いが少し異なる。ヒュームは積極的に仮説形成を行う一方で、そのぶん**反証**の手続きを重視している。
- ちなみに、ヒュームがやっているのは、人間精神の「メカニズム」の解明ではない。しばしば、研究者たちは**ヒュームの機械論哲学に対する否定的意見**を等閑視してきたと思う。

★ 要するに、第1部「自然主義」では何が論じられるのか？

これまで漠然と「ヒュームの自然主義」と呼ばれてきたものの多くに**実質的な内容**を与える。

第一章： 実験的推理法の因果論による根拠づけの分析

第二章： 実験的推理法の具体的な推論規則の分析

第三章： 実験的推理法の情念論における適用の分析

→ **ヒュームの方法論的自然主義**。ヒュームの自然主義の「自然」は、ふつう人間本性 (human nature) の「自然」だとされているが、じつはそれだけではないのだ。

→ ヒューム哲学は、従来の解釈者たちが考えているよりも、より優れて自然主義的である。こう言ってよければ、**きわめて現代的**。

第四章の（著者自身が考える）見どころ

懐疑と自然

- ヒューム哲学は、いま述べた以上に、より優れて自然主義的である。なぜなら、ヒュームの懐疑論は、探究に「先立つ」懐疑論ではなく、探究の「結果として生じる」**自然主義的懐疑論**だから（cf. 久米暁 2005『ヒュームの懐疑論』）。
- 本書では、「理性に関する懐疑論」と「感覚能力に関する懐疑論」という二つの懐疑論を**パラレルに分析**する。
- また、本書の分析は、ヒュームの議論のどこに問題があるのかを明らかにする**批判的分析**を提供する点にも特徴がある。
- さらに、ケンプ・スミス以来の「**自然的信念**」という有力な解釈概念にも**部分的な修正**を要求する。

ピュロン主義的メタ哲学

- 『人間本性論』第一巻「この巻の結論」に理論的解釈を与える。そして、「**自然主義**」解釈 vs. 「**懐疑主義**」解釈という長年の論争に決着をつけることを目指す。
- とはいえ、あらためて振り返ってみれば、じつはポップキン（1951）でほとんど決着がついていたのでは？³
- だから、ある意味では、私がやったのはまったく新しい解釈を出すというよりも、この解釈をより明瞭に提示し、同時に、他の有力な解釈（とくにギャレット）を徹底的に退けることである⁴。 （続く）

³ Popkin, R. (1951) "David Hume: His Pyrrhonism and His Critique of Pyrrhonism". (今から見れば粗いところもあるが、さすがに一流の思想史家。)

⁴ Garrett, D. (1997) *Cognition and Commitment in Hume's Philosophy* など。

第五章の（著者自身が考える）見どころ

- しかし別の意味では、本書はヒュームの懐疑主義にまったく新しい理解をもたらすかもしれない。すなわち、本書は、ヒュームのさまざまな懐疑論は、じつは「結論」において総合されて、「**ヒュームの統一的懐疑論**」とでも呼べるものを形成しているという解釈を提案する。
- **ヒュームの懐疑論とは**、究極的には、因果やら外的世界やらの存在に対する形而上学的な疑いではなくて、**人間本性の諸原理が矛盾しているかもしれないという疑い**だということになる。彼の主著は『人間本性論』であることを思い出すべき。
- 20世紀以降のヒューム研究をリードしてきたケンプ・スミスからギャレットに至る「**自然主義**」解釈——ヒュームは人間本性が理性的懐疑論を解消すると考えたのだという解釈——は、もはや維持できないだろう。

（続く）

第五章の（著者自身が考える）見どころ

- さて、このような懐疑論にもかかわらず、ヒュームは自然主義的探究に復帰する。でも、どうやって？

思い切って単純化すれば——

- （１）ヒュームのような「**首尾一貫したピュロン主義者**」は、懐疑論そのものにも懐疑論を適用する。すなわち、人間本性の諸原理（とくに「知性」）が矛盾しているかもしれないという彼自身の疑いが正当化できることすら疑う。
- （２）ピュロン主義的な懐疑は否定ではない。懐疑は肯定と否定の対立から生じ、判断は保留される。自然主義的探究の継続の意義は、ピュロン主義によっては否定されない。
- したがって、ヒュームは「好奇心」と「野心」に促されたとき、「捉われのない仕方での哲学」を継続できる。

★ 要するに、第II部「懐疑主義」では何が論じられるのか？

自然主義者としてのヒュームと、懐疑主義者としてのヒューム、
これらが**相対する二つの顔だ**という**従来**の解釈を覆す。

第四章： ヒュームの懐疑論は自然主義的懐疑論である。

第五章： ヒュームの自然主義的探究はピュロン主義に基づいて継続される。人間本性についての学が、将来的に成功する見込みは否定されていない。

→ 言い換えると、ヒュームは自然主義的探究を通して懐疑主義に行き着き、懐疑主義の徹底を通して自然主義的探究へと復帰する。

→ 「**統合的解釈**」と呼んでいるのはこれ。

最後に、ちょっとだけ感想とか

本を書いてみた実感として

- 本書のなかで批判された研究のなかにも、優れたものはたくさんある。また、私にはどうしても素晴らしいとは思えない研究ですら、それらのおかげで本書の議論は鍛えられた⁵。
- 本書も、仮に大きく間違っているとしても、ヒューム哲学について重要なことを学べるものになっているという自負がある。願わくば、堅実な研究書として流行ってほしい。
- と言っておいて何だけど、「ヒュームの自然主義と懐疑主義」という王道のテーマで書けたのは、ヒューム研究の流行をほとんど意に介さないところがあったからだと思う。
- ヒューム自身によって書かれたものを虚心坦懐に読もう。

⁵ Cf. “He who knows only his own side of the case knows little of that.”
(J. S. Mill, *On Liberty*, Ch. II)

それでも、本書の読み方？

- もちろん好きなように読んでいただいて大丈夫です。
- とはいえ、各章は独立ではないので、普通の人からは前から素直に読むのがよさそう。
- 各章ごとに小括があるので、最初に目を通すとよいかもしれない。もちろん索引もざっと眺めてみてください。
- 他方で、とりあえず註は気にしないでOK。スコラ的な議論は積極的に註に追い出し、本文でストーリーを追えるように気をつけました。

とはいえ――

- 本文に納得できないときに註を見ると、オルタナティブな諸解釈の是非について議論されていることがあるかも。
- 註でこそ面白い話をしている場合も多々あるかもしれない。著者としては、結論(2)などは必読だと思っています。

おわり
